

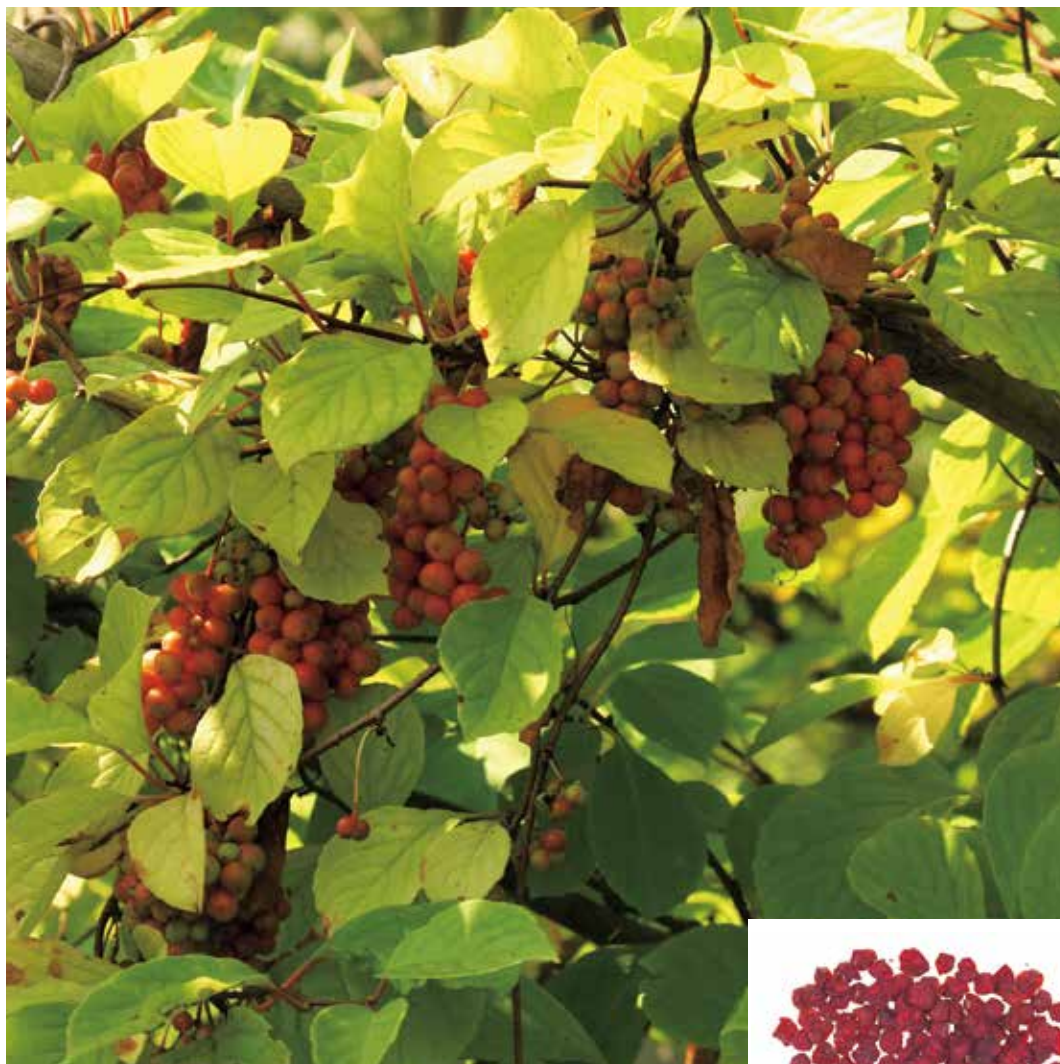
2019.10  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

10号

第41巻

No.363



チョウセンゴミシ *Schizandra chinensis* Baill. (マツブサ科 *Gehisandraceae*)

**生薬** ゴミシ（五味子） 秋、完全に熟してから果実を採取し、陽乾する。

**成分** リグナン類：schizandrin A-D, deoxyschizandrin, gomisins A-D, F, pregomisins、精油：citral,  $\beta$ -chamigrene,  $\beta$ -chamigrenal, sesquicarene、有機酸：citric acid, malic acid 等。

**効能** 鎮咳、収斂、止瀉、滋養、強壯薬として慢性の喘息、口渇、下痢、多汗、疲労などに応用する。杏蘇散、小青竜湯、清肺湯などの漢方処方にて配合される。また、滋養強壯を目的に薬用酒として飲用される。



生薬 ゴミシ（五味子）

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



『神農本草経』（1C-2C）に「五味、味は酸、温。山谷に生ず。気を益し、欬逆上気、労傷（肺結核様疾患）、羸瘦、不足を補い、陰を強め、男子精を益す」とあり、古くから用いられた薬剤です。朝鮮半島、中国東北、華北、アムール、樺太、日本では本州中部の長野県や山梨県と北海道で普通に見られるつる性落葉木本です。明るい林縁や湿り気のある低木林内を好み、つるは所々分枝し、径1cm以上にはならず、地中に地下茎を長く伸ばし繁殖します。葉は互生し、倒卵形で光沢がなく、膜質、先が尖り、縁に鋸歯があります。雌雄同株で初夏、葉腋に淡黄白色の単性花を咲かせ、秋にブドウ状に赤い液果をつけます。『新修本草』（659）に「五味は、皮、肉は甘く酸く、核中は辛く苦く、全体に鹹味がある。それで五味が具わるのだ」と語源になったことが記されています。同属植物の

マツブサ (*S.repanda*) は北海道から九州、南朝鮮に自生するつる性の落葉木本で、古いつるは太く表面をコルク層が覆い、切り口は松脂の匂いがします。葉は互生し、広楕円形、質がやや厚く、初夏に葉腋に淡黄緑白色の単性花を咲かせ、秋にブドウの房状に藍黒色の果実を実らせませす。他に国内に自生するマツブサ科の植物には関東以西から四国、九州、濟州島、中国、台湾に分布するサネカズラ (*K.japonica*) があります。つる性常緑木本で、古いつるは褐色のコルク質に包まれ、径2cm位になります。葉はやや厚く、光沢があり、夏に葉腋から淡黄白色の単性花を咲かせませす。果実は果柄の先に赤く熟する液果が球状に集まります。

チョウセンゴミシの名が現れるのは比較的遅く、『大和本草』（1709）に「朝鮮の産を用いること可」とあり、『薬籠本草』（1734）には「朝鮮より来る者、即ち北五味子也」と続いて『物類品彙』（1763）には詳しく「五味子二種あり。北五味子、朝鮮種、享保中種を伝えて今官園に植える。葉、杏葉に似て蔓延す。実、南五味子と大体相似たり。駿河産、朝鮮種と異なることなし。享保中台命ありて、薬を採しむる時、初めて此の物あることを知る。今に至って毎歳是を官に献ず」とあり、享保年間（1716-36）に朝鮮から種子が渡来し栽培した結果、国内に生育していた種と同じことが分かりチョウセンゴミシ（朝鮮五味子）の名が付けられました。小石川御薬園の「御預御薬草木書付控」の享保七寅年（1722）中に「（紀州熊野より）五味子、六株」とありますが、生息地を考えると暖地を好むサネカズラ（南五味子）ではないかと推測します。享保八卯年（1722）中には「（甲州）五味子、一包」とあり、初めて日本産チョウセンゴミシの種子が一包入手されたのではないかと考えられます。甲州は内陸の寒冷地にあたり、現在でも野生のチョウセンゴミシが自生しています。『日用薬品考』（1810）にはもっと詳しく「朝鮮のものを方書に遼五味子と云う。即ち北五味子にして上品なり。……和産に二種あり。北五味子は或いは朝鮮種を伝栽しものなりと云う。薬肆に售るもの信州より出ず。皆北五味子にして朝鮮のものに異ならず」と長野産が使われたようです。

以上のことから、享保以前の本草書の五味子は、『本草和名』（918）に「和名、佐祢加都良」、『倭名類聚抄』（931-7）に「和名、作禰加豆良」、『多識編』（1612）に「左祢可都良」、享保に入ってから『用薬須知』（1726）に「和はさ子かづらの実なり。是本草の南五味子なり」とどれをとってもサネカズラを当てています。江戸時代以降も日本ではサネカズラの果実を南五味子として同様に利用していましたが、品質は劣るようです。もう一種のマツブサについては『本草綱目啓蒙』に「一種マツブサと云うあり。……泉州、紀州、播州、土州（伊予）山中に多し。……冬結るは北五味子と同じく、花も亦同じ。実も亦穂をなして生し熟して黒色なり。……これも亦和産の北五味子なり」と述べ、五味子としての利用があったものと考えます。

（村上守一 記）